

博物館休館日カレンダー 2026年 8月							
日	月	火	水	木	金	土	
26	27	28	29	30	31	1	
2	3	4	5	6	7	8	
9	10	11	12	13	14	15	
16	17	18	19	20	21	22	
23	24	25	26	27	28	29	
30	31	1	2	3	4	5	

休館日 ※情報はR8.7.15現在

博物館だより

No.237



令和8年8月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

夏休みミニ企画展

「みやここと世界の昆虫展」開催中！

現在、博物館では、町内在住の松田勝弘氏が地元・豊津地域をはじめ、国外ではペルー、ジャワ島、ボルネオ、ニユーギニア、アマゾンなど世界各地で採集した、チョウやカミキリムシなどの昆虫標本を展示しています。

これらの標本は令和2年に当館に寄贈されたもので、中には温暖化などの環境の変化により、今では採集ができない昆虫も含まれるなど大変貴重な資料となっています。

彩り鮮やかな羽根をもつチョウやこどもたちに人気のカブトムシなど、世界各地の様々な昆虫を見ることが出来る機会です。夏休みの思い出に是非ご来館ください。

■会期…8月30日(日)まで

■場所…みやこ町歴史民俗博物館

■内容…294種類1486点

の昆虫標本



▲八景山(豊津)で採集されたカブトムシ(左)とクワガタムシ(右)



▲青色の羽根が美しいペルー(左)とアマゾン、ギアナ高地(右)の「モルフォ蝶」。



◆講座・教室・催し物ガイド

8月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

8月1日(土) 9時30分～

【古文書講座】

8月8日(土) 10時～

【古典かな講座】

8月15日(土) 9時30分～

【みやこ学講座】

8月23日(日) 10時～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

◆みやこ町ふるさと遺産フェスタ 絵画コンクール作品募集！

博物館では町内に所在する古墳や三重塔などの重要な文化財や、様々な分野で功績を残した町の先人など「地域の宝」をテーマにした絵画コンクールを開催します。作品の応募方法は次のとおりです。

【応募要領】

●作品の規格等

四つ切りの画用紙を使用し、画材は自由ですが、油絵は応募できません。

●応募資格

町内在住、若しくは町内小・中学校に通学している児童・生徒

●応募できる作品数 1人につき1点

●応募方法

応募票に必要事項を記入し、作品の裏面に貼付。博物館に郵送または持参。作品の応募は学校単位、個人単位いずれも可。

●応募締切 令和8年9月9日(水)(必着)

●応募先・問い合わせ先

みやこ町歴史民俗博物館

「絵画コンクール」担当

TEL 0930-33-4666

6月の業務日誌から

6月18日(木)「勝山地区高齢者大学たちばな会」の受講生が視察研修で「昭和100周年と吉田増蔵展」の見学のため来館しました。元号「昭和」考案者、吉田増蔵について詳しく学んでいました。

6月18日(木)犀川帆柱の永沼家住宅で、みやこ観光まちづくり協会主催の研修が行われました。文化遺産ガイドボランティアが国指定重要文化財の住宅の説明を行いました。



▲夏季に多くの観光客が訪れる永沼家について詳しく説明を行いました。



▲昭和レトログッズのコーナーでは実際に家で使っていた家電製品もみられました。

みやこの歴史発見伝 100年前の「蟬の声論争」

189

「閑さや岩にしみ入る蟬の声」

蟬の声に風情を感じる季節となりました。近年の急激な温暖化に伴う猛暑により、活動する昆虫の種類やその時期にも変化がみられますが、蟬の鳴き声は本格的な夏の到来を感じさせるものです。

この蟬の鳴き声を詠んだ代表的な句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」は、元禄2年5月27日（現在の暦では1689年7月13日）に松尾芭蕉が出羽国（現在の山形市）の立石寺（山寺）に参詣した際に詠んだ句で、『おくのほそ道』に収録されています。

この句はもと「山寺や石にしみつく蟬の声」、「さびしさや岩にしみ込む蟬の声」と詠まれていたと伝えられ、山寺の静



ニイニゼミ
(松田勝弘氏寄贈標本より)

寂な風景の中で蟬の鳴き声が巧みに表現された句として知られています。

今回はみやこ町出身で夏目漱石門下の文芸評論家、小宮豊隆が、日本を代表する歌人の斎藤茂吉と、この句で最も重要な「蟬」の種類を巡って激論を交わした「蟬の声論争」についてご紹介いたします。

ニイニゼミかアブラゼミか？

今から100年前の大正15年（1926）9月に、斎藤茂吉は雑誌に「この句に出てくる蟬はアブラゼミである」と断定した文章を掲載しました。これをきっかけに蟬をめぐる文学論争がおこります。

翌年、岩波書店の創業者である岩波茂雄は、この論争の舞台を設け、斎藤茂吉をはじめ、小宮豊隆、安倍能成、野上豊一郎などの文人を集めました。特に能や歌舞伎、俳句などの伝統芸術にも造詣が深く、アブラゼミと主張する斎藤茂吉に対し、小宮豊隆は「閑さや」や「岩にしみ入る」という句は威勢のよい鳴き声のアブラゼミでは釣り合わず、元禄2年5月末は太陽暦に直すと7月上旬となり、アブ

ラゼミはまだ鳴いていないことを理由に「この蟬はニイニゼミである」と主張し、斎藤茂吉と対立します。

7月上旬頃に、山形でみられる蟬は、ニイニゼミ、ヒゲラシ、アブラゼミなどが挙げられます。蟬は一般的に地中温度が25℃になると羽化の準備を始めるといわれますが、他のセミと比べてニイニゼミは、若干早く梅雨明け頃から活動をはじめます。

その後、斎藤茂吉が調査を行った結果、立石寺でアブラゼミが鳴くのは7月13日以降と確認できたことから、昭和7年（1932）6月、斎藤茂吉は誤りを認め、持論を撤回し「芭蕉が詠んだ句の蟬はニイニゼミであった」と結論付けました。

2年越しの論争は、小宮豊隆が斎藤茂吉を論破した形で幕を閉じます。負けず嫌いで頑固な性格であった斎藤茂吉は、議論では常に「絶対に負けない」と意気込んで臨み、しばしば相手を論破することもあったと伝えられます。そのため「文学的にはアブラゼミを否定している」と結論付けた斎藤茂吉の言動は極めて稀有なことであり、日本



斎藤茂吉が小宮豊隆に贈呈した図書（当館所蔵）

を代表する歌人の斎藤茂吉が最も得意とする歌を巡って持論を撤回した理由については、小宮豊隆による緻密な自然観察の結果に敬意を表したのかもしれない。

鰻と戦争の記憶

斎藤茂吉といえば食通で知られています。特に彼は無類の「鰻好き」であり、生涯に食べた鰻は千尾以上と伝えられ「日本史上、最も鰻を食べた人物」とも称されています。鰻は猛暑による夏バテ解消や疲労回復効果に期待できる代表的な食材ですが、茂吉は日記で902回も鰻に言及し、昭和16年には96回も食べたことが確認できます。茂吉はその生涯で17907首の歌を作っていますが、このうち32首は鰻を歌っています。

時代が日米開戦に向う頃、茂吉は戦争による食糧難で、好物

の鰻が食べられなくなること予想します。これは彼にとつて文字通りの死活問題ですが、そんな彼の悩みを解決したのが、当時は珍しかった鰻の缶詰です。

茂吉は開戦の一年前から銀座のデパートで鰻の缶詰を大量に買い占めて押入れにストックします。戦時中（昭和18年7月21日）の日記には「午食に数年前買っておいた鰻の缶詰を一つ開いて、二度に食った。」と、備蓄した鰻の缶詰を惜しみながら食べた記載をみることができま

す。同じ頃、茂吉の疎開先の町長が、講演嫌いな茂吉に講演を依頼した際、謝礼に鰻をご馳走することを提案すると、彼は講演を快諾し、予定時間を超過して話し続けたというエピソードも残されています。また終戦から数年を迎えた夏に、結局食べきれずに錆びてしまった缶詰を前にして、『戦中の鰻のかんづめ 残れるがさびて居りけり 見つつ悲しき』という歌を詠み、戦中戦後の苦労を共にした缶詰を偲んでいます。（井上信隆）